

# Jews and Latvian of Riga in 1941 : On Latvian Collaboration in German-Occupied Riga

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/27725">http://hdl.handle.net/2297/27725</a>             |

# 1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人

——ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって——(前篇)

野 村 真 理

I はじめに

II 1941年7月のリーガ

III リーガのユダヤ人

(以上、本号掲載)

IV ポリシェヴィキはユダヤ人か

V おわりに——いま何が問題か

## I はじめに

ナチが大量のユダヤ人を射殺するのに、「缶詰イワシ方式」と呼ばれたやり方がある。あらかじめ深く掘った穴の底に最初のユダヤ人を隙間なく列状に横たわせ、彼らの射殺が終わると、その死体の上に、今度は死人の足の側に頭を置くようにして次のグループのユダヤ人を横たわせる。こうして射殺体が数層重なると、穴は土で覆われた。

多くの場合、射殺は、ユダヤ人を掘った穴の淵に並ばせ、死体が穴のなかに転がり込むよう背後から撃つやり方で行われた。どちらのやり方でも、犠牲者の苦痛に差はなかったかもしれない。しかし、人間をモノ扱いし、墓穴の利用の効率性を追求する缶詰イワシ方式は、ただ残酷というのとは別種の薄気味悪さを感じさせる。この方式を好んで採用した親衛隊兼警察大将こそ、1941年11月30日と12月8日、リーガ近郊のルンブラの森で、推定2万5000人以上ものユダヤ人の殺害を指揮したフリードリヒ・イエツケルンである<sup>1)</sup>。

戦後、連合国に逮捕され、ソ連の軍事法廷に引き渡されたイエツケルンは、

リーガで裁判を受け、1946年2月3日、リーガの自由記念碑広場で公開絞首刑に処せられた。リーガのホロコースト生存者の1人、マックス・カウフマンは、回想録『ラトヴィアのフルブン』で、処刑に先立つ法廷でのやりとりを次のように再現している<sup>2)</sup>。

イエツケルン「他国からラトヴィアに移送されたユダヤ人の数について、ラトヴィアで殺害されたユダヤ人の数と同様、私の知るところではありません。われわれドイツ人が権力を掌握する前に、ラトヴィア人によって多くのユダヤ人が根絶やしにされたため、もはや正確な数をつきとめることはできないのです。」

検 察 官「絶滅のためにユダヤ人を他国からラトヴィアに移送したのはなぜですか。」

イエツケルン「ラトヴィアは、そのような殺害に適したところだったからです。」

リーガは、そこで現地のユダヤ人が殺害されたのみならず、1941年から1942年にかけての冬、大ドイツ国家領域から推定1万9000人のユダヤ人がそこへと移送され<sup>3)</sup>、殺害されたところである。それに対してイエツケルンは、ラトヴィアは、ホロコーストのために選ばれるべくして選ばれた土地だったというのだ。カウフマンは、イエツケルンの言葉にこう付け加える。

「われわれ生存者は、当時ラトヴィア人が作り出した『適したところ』とは何であったか、あまりにもよく知っている<sup>4)</sup>。」

カウフマンがイエツケルンの証言を引くのも、彼が、ラトヴィア人はナチに命じられるまでもなく、自分たちの意思でユダヤ人に対する暴行と殺害に着手したと確信するからである。カウフマンによれば、ラトヴィア人の協力をあてにできればこそ、ラトヴィアはナチによって選ばれた土地になったのだった。

1896年生まれのカウフマンは、成人としてホロコーストを体験し、1947年という、戦後かなり早い時期にミュンヘンで回想録を出版した。歴史研究者ではないカウフマンの記述には、自身の体験に他人から聞いた情報や噂、戦後に得た知識が入り混じり、憶測にもとづく不正確な数字や事実関係の誤認

もあり、史料として扱うには注意が必要である。しかし、少なくともラトヴィア人のユダヤ人迫害に対する苦々しい非難には、カウフマンの実体験と実見聞に裏付けられた証言としての真実性が期待され、事実、そのようなものとして説得力を保ってきた。20歳すぎの医学生としてリーガのホロコーストを体験し、1992年になって『ラトヴィアにおけるユダヤ人の殺害』を出版したベルンハルト・プレスもまたカウフマンに同意し、ラトヴィアでもリトアニアでも、「ユダヤ人の同胞市民を殺害したのは、主として現地の人間、すなわちラトヴィア人とリトアニア人であった」と断言して憚らない<sup>5)</sup>。

これに対して、ホロコースト生存者の細かい記憶違いには目をつぶっても、カウフマンらのラトヴィア人非難だけは文字通りには認められないとするのが、アメリカ在住のラトヴィア人歴史研究者アンドルー・エゼルガイリスである。エゼルガイリスは、戦後、多くの在外ラトヴィア人歴史研究者がラトヴィア人のナチ協力問題に沈黙するあいだ、それを認めることに吝かではなかった。そのため、彼らから裏切り者呼ばわりされたという<sup>6)</sup>。しかし、1996年に出版された著書『ラトヴィアのホロコースト<sup>7)</sup>』で、エゼルガイリスは、とりわけ議論の的となる独ソ戦開戦直後のラトヴィア人によるユダヤ人迫害は、あくまでも裏でナチによって仕組まれ、誘導されたものであり、イエツケルンが言うようなラトヴィア人のみによる自発的ユダヤ人殺害の存在は、史料的には証明できないとする。それに、なぜユダヤ人は、最後までホロコーストの責任を負うことを拒否したイエツケルンのごとき人非人の言うことを信用するのか、というのだ。

1939年9月にナチ・ドイツがポーランドに攻め込んだとき、現地のポーランド人による侵略者協力はありえないことだった。それが<sup>8)</sup>、1941年6月22日にドイツ軍が独ソ国境を越えたとき、状況はまったく異なる。1939年8月の独ソ不可侵条約に付随する秘密議定書にもとづき、ソ連の勢力圏に組み込まれたバルト3国やポーランドの東ガリツィア(西ウクライナ)では、ドイツ軍は、ポリシェヴィキの恐怖支配からの解放者として現地住民の花束に迎えられた。他方でユダヤ人は、現地住民により、ソ連支配時代にポリシェヴィキが犯したあらゆる悪行の張本人とされ、彼らの集団的暴行——ボグロム——にさらされる。ナチの特別行動隊<sup>8)</sup>は、これら現地住民の協力を得て大量の

ユダヤ人狩りを行い、ポリシェヴィキに対する報復として銃殺した。なかでも最大規模のポグロムと処刑が執行された東ガリツィアのルヴフ(ウクライナ語ではリヴィウ)では、ドイツ軍侵入後の数日間に推定4000人のユダヤ人が殺害されたという<sup>9)</sup>。

ドイツ軍侵入直後の現地住民によるいわゆる「自発的」ポグロムに関して、ナチが一定のシナリオを持っていたことは、エゼルガイリスのみならず、現在、ホロコースト研究者のあいだでは周知の事実である。すなわち、独ソ戦前夜の1941年6月17日、帝国保安本部長官ラインハルト・ハイドリヒは、ドイツ軍に同行する4隊の特別行動隊の隊長に対し、口頭で、現地の共産主義者とユダヤ人の掃討を、ドイツ人の手によらず、現地住民による「自己浄化運動」として始動させるよう指示していた。指示の詳細は、6月29日付けの以下の書面で知ることができる。

「あらたに占領さるべき地域の反共産主義的あるいは反ユダヤ的集団による自己浄化運動は、これを妨げてはならない。それどころか、必要であればそのような運動を、それと気づかれぬように誘導し、強化し、正しい方向へと導かねばならない。ただし、そのさい、それら現地の『自警団』が、あとになって何らかの指示や政治的確約の付与をたてに取るようなことが起こってはならない<sup>10)</sup>。」

さらに、両大戦間期リトアニアの首都カウナスでハイドリヒの指示が実現されたことは、ドイツ軍北部方面隊<sup>11)</sup>に同行した特別行動隊Aの隊長ヴァルター・シュタールエッカーが残した報告書<sup>12)</sup>によって知ることができる。1941年、シュタールエッカーが、ドイツ軍の先発部隊および特別行動隊の少人数の先遣隊とともにカウナスに入ったのは、夜、おそらく日付けが6月25日にかわるころであった。報告書によればシュタールエッカーは、ただちに現地の反ソ抵抗組織に接触し、彼らの同意を得ることに予想外に梃ずりつつも、彼らにポグロムを始めさせることに成功したという。そのさいシュタールエッカーにとって重要だったのは、こうした策動の存在が、外部の者にいつさい気づかれてはならないことだった<sup>13)</sup>。さらに、反ソ抵抗組織がめざして

いたのはリトアニアの再独立であったが、ハイドリヒの指示は、ナチ協力が彼らの独立要求の取引材料にされないよう、注意を促しているのである。

しかし、ナチに誘導されたリトアニア人は、意思なき操り人形であったとはいえない。そもそもハイドリヒの指示は、机上の空論ではなく、実現の見込みがあればこそ発せられた。拙稿「自国史の検証——リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐる」で詳述したように<sup>14)</sup>、リトアニアでは、独ソ戦に先立つソ連占領時代に、すでに現地住民の意識のなかでポリシェヴィキ支配とユダヤ人支配のリンクが行われ、ナチが唱えるユダヤ＝ポリシェヴィキ殲滅戦に共鳴する土壤が形成されていたからである。さらに、歴史的に根深く存在するリトアニア人の反ユダヤ感情も忘れてはならない。情報活動を通じてナチは、こうした現地の状況をよく把握していた。そして、見込み通り現地住民による自己浄化運動の始動に成功すると、住民のユダヤ＝ポリシェヴィキ支配に対する怒りの爆発を独ソ戦を正当化するプロパガンダに利用したのである。

では、ラトヴィアはどうか。

エゼルガイリスは、まず第1に、キリスト教ヨーロッパ世界の歴史において、ラトヴィアは相対的に反ユダヤ感情が希薄な土地であったとする。さらに第2に、20世紀はじめから社会主義労働者運動が一定の影響力を持ったラトヴィアでは、人々の意識において、ポリシェヴィキはすなわちユダヤ人、というわけではなかった。両大戦間期の独立を喪失した1940/41年のソ連支配時代のラトヴィアでも、ユダヤ＝ポリシェヴィキという同定が広く流布していたとはいえないとする。第1、第2の歴史的事実を踏まえれば、ラトヴィア人がことさらユダヤ人を殺害しなければならない理由などないはずだ。結局、ホロコースト生存者が怒るラトヴィア人のホロコースト協力とは、ごく一部の者が、ナチがしつらえた舞台上、ナチが作り上げたシナリオを忠実に演じただけであり、そのさいナチのシナリオとプロパガンダが完璧であったために、ユダヤ人はラトヴィア人を「ヒトラーの自発的死刑執行人」と思い込んだというのである。

筆者は2009年3月23日、リーガのホロコーストの生存者の1人で、リーガのユダヤ博物館を創設したマルジェルス・ヴェステルマニス氏にインタビューする機会を得た。ヴェステルマニス氏によれば、ラトヴィア人のホロ

コースト協力を極力限定的に捉えようとするエゼルガイリスの主張に対し、ユダヤ人のあいだでは非難の声があがったという。1941年7月のリーガで、ラトヴィア人とユダヤ人のあいだに何が起こったのか。エゼルガイリスとユダヤ人の応酬を見ると、いま何が問題とされるべきなのか。

筆者はこれまで、上述のカウナスのほか、東ガリツィアのルヴフを取り上げ<sup>15)</sup>、独ソ戦下のリトアニア人およびウクライナ人のホロコースト協力の経緯を検証し、戦後リトアニアおよびウクライナにおけるその記憶のあり方を問題にしてきた。本稿では、カウナス、ルヴフとの比較を念頭におきつつ、リーガを取り上げ、ラトヴィア人のホロコースト協力とその記憶を考える上で着目されるべき問題をまとめておきたい<sup>16)</sup>。

なお、ラトヴィア語の史料や研究文献が読めない筆者の研究には、決定的な限界がある。本稿は、管見によれば邦語による本格的モノグラフがないかぎりでの試論の域を出るものではない。最後に、主に両大戦間期を扱う本稿では、ラトヴィアの地名は原則的にラトヴィア語で表記した。ただしラトヴィヤは、慣例に従いラトヴィアと表記した。ラトヴィアの地名および人名の読み方については、東京外国語大学大学院博士後期課程でラトヴィア語学、ロシア語学を専攻される堀口大樹氏に点検していただいた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

## II 1941年7月のリーガ

最初に1941年7月はじめのリーガの状況について、可能なかぎり事実関係をおさえておきたい。

ダウガヴァ川左岸に住むエルマル・リヴォシュが、晴れ渡った青空に見慣れぬ戦闘機を認めたのは、6月22日の早朝だった。飛行機音は、夜のうちから聞こえていたという。何事かと訝しながらも、リヴォシュは、息子を幼稚園のサマーキャンプに行かせることにした。それがとんでもないことだとわかったのは、正午のヴァチエスラフ・モロトフのラジオ放送で独ソ戦の始まりを知ったときだった。しかし、最初にリヴォシュの心をとらえたのは、息子の心配ではない。

「人々は民兵隊に志願している。私は伝令として登録した。私には、妻に2人の子供に母もいる。私はみんなを愛していたが、突然、彼らのことは隅に追いやられた。重要なのは敵と戦うことだ。私は、ずっと確固たる平和主義者だったし、いまもそうだ。この180度の変化をどう説明したらいいのだろう<sup>17)</sup>。」

1942年2月4日にリーガのゲッターを脱出し、1943年から1944年にかけて、隠れ家で日記をもとに執筆されたリヴォシュの覚書は、このとき彼が民兵隊への参加を決意したことで、他のユダヤ人の回想録にはない貴重な情報を提供するものとなる<sup>18)</sup>。6月22日、ソ連の構成国であったラトヴィアでは、ただちに総動員令が発令され、1905年から1918年までに生まれた者は兵士登録所に出頭するよう命じられる。しかし、ラトヴィア人の多くは様子見を決め込み、総動員令は機能しなかった<sup>19)</sup>。そのため当局は、早々に強制徴兵をやめ、代わりに創設されたのが志願兵からなる民兵隊である。志願者は、共産党の活動家やコムソモール(青年共産主義同盟)の団員だった。リヴォシュのような、おそらく党とは無関係のユダヤ人がどの程度参加したのか、彼の覚書からはわからない。

ドイツ軍北部方面隊のうち、破竹の勢いでリーガをめざした第18軍がダウガヴァ川左岸に到達したのは、6月27日か28日のことである。リヴォシュの民兵隊は、空港があるダウガヴァ川左岸のスピルヴェ近く配置されるが、覚書にはほとんど日付けが記されていないため、彼らが応戦したのが左岸に迫ったドイツ兵だったのか、それとも、日付けは27日以前で、独ソ戦の始まりとともに行動を開始した反ソ抵抗組織が相手だったのか、不明である。リヴォシュによれば、敵は撃ってくるが、どこにいるのかわからず、後方は静かだったが、周囲を敵に囲まれたような状況だった<sup>20)</sup>。いずれにせよ、ドイツ軍とソ連軍の最初のかかなりの規模の戦闘は、6月末、西方から敗走するソ連軍が川に退路を阻まれたダウガヴァ川左岸で起こる。このときドイツ軍にとっての次なる問題は、いかに川を渡り、リーガの中心部に攻め込むかであった。

リヴォシュらの民兵隊は、6月30日にダウガヴァ川右岸の鉄橋のたもとの中央市場に移動を命じられたというが<sup>21)</sup>、移動は、おそらくそれより前、すなわち橋の爆破より前であったと思われる。ドイツ側の記録によれば、ドイ

ツ軍の先遣隊が鉄橋と並行して走る道路橋を渡ることに成功し、右岸に突入したのは6月29日の昼頃だった。しかし、先遣隊は、ソ連軍の反撃で橋の確保には失敗する。ソ連軍は、道路橋と浮き橋を爆破、6月29日から6月30日にかけての夜、唯一残る鉄橋も部分的に爆破した。右岸に孤立した先遣隊は撃破され、リヴォシュらは「われらドイツの攻撃を跳ね返せり」と子供のように喜ぶが、それは「まったくのナンセンス」だった<sup>22)</sup>。というのも、戦況はすでに明らかだったからである。塹壕を掘るリヴォシュらの前を通り過ぎるのは、武器をなくし、なかには裸足で撤退する敗残のソ連兵だった。疲れ切った兵士を満載したトラックは、さらによじ登ろうとする仲間を足で蹴り落として走り去った。

先遣隊による突入が失敗した後、6月30日から7月1日にかけての夜、ダウガヴァ川上流でボートと小型蒸気船に分乗し、右岸のマスカヴァス通りのはずれに渡ることに成功したのは、連隊長ヴィルヘルム・ウラスベルガーに率いられた一隊だった。リヴォシュは、マスカヴァス通りをリーガに向かうソ連軍のトラックの乗員からドイツ軍上陸を知らされ、すべては終わったと観念した<sup>23)</sup>。橋の爆破で時間稼ぎをしたリーガのソ連軍は、すでに6月30日の昼頃、ほぼ撤退を完了し、民兵隊を指揮していた軍の司令官も、民兵を見捨てて姿を消していた。

川の両岸で続いていた銃撃音は、6月30日の午後にはほとんど止み、街は不気味なほど静かだったという<sup>24)</sup>。しかし、7月1日の朝、街は一変する。上陸地から街の中心部に向かったウラスベルガーの一隊は、日曜日用の晴れ着を着て、花を手にした人々に迎えられる。街路にすえられた拡声器からは、それまでのインターナショナルにかわり、ラトヴィア国歌が流れていた。リヴォシュは次のように記している。

「7月1日朝。外に出る。数名の人々が、笑い、抱き合いながら走り出る。一軒の家には、赤白赤[ラトヴィア国旗]が掲揚されている。若者の集団が通りかかる。彼らは旗のところで帽子を放り上げ、『万歳』と叫ぶ<sup>25)</sup>。」

ラトヴィア独立を記念する自由記念碑に面したリーガの最高級ホテル「ホテル・デ・ロメ」に陣取ったウラスベルガーは、街の代表者から「解放者」として称えられた<sup>26)</sup>。さらに同日、驚くべき速さで、ヒトラーの写真とドイツ軍を歓迎する市民の写真を掲載したナチ公認のラトヴィア語新聞『テーヴィ

ヤ[祖国]』が創刊される。その第1面で、ウラスベルガーの名により、旧ラトヴィア軍の軍人ヴォルデマルス・ヨハンス・スカイストラウクスの指揮下にラトヴィア人からなる補助警察(palīgpolicija)が創設されること、午後10時から午前6時まで、夜間の外出が禁止されることが告げられた。補助警察には、ドイツ語でHilfpolizeiの添え書きがあり、また補助警察員は、ラトヴィア国旗と同じ赤白赤の腕章をつけることになっていた<sup>27)</sup>。他方ラジオでは、旧ラトヴィア警察の警察官らにもとの部署にもどるよう呼びかけが行われ<sup>28)</sup>、ヴィクトルス・アラースが特別行動隊Aの隊長シュタールエッカーに出会うのも、呼びかけに応じて集まった元警察官や元軍人でこつた返すラトヴィア警察本部である。アラースは、1935年にリーガの警察学校に入学し、1939年に大学にもどるまで警察関係の仕事に就いた経歴を持つ。

アラース・コマンドの名で知られたユダヤ人殺戮部隊を率いたアラースは、終戦時にドイツに脱出し、1975年7月10日、旧西ドイツのフランクフルトで逮捕されるまで、ヴィクトル・ツァイボツという偽名で生き続けた。1979年12月21日に終身刑を言い渡されるまで続いたアラース裁判で(1988年に獄中死)、アラースは、自身の犯罪行為に関して真偽ない交ぜの証言を残している。

アラースの証言によれば、彼が行動を起こしたのは1941年の7月1日になってからではない。ドイツ軍のダウガヴァ川右岸上陸が間近と思われた6月29日、アラースは400人から500人のパルチザンを率いてソ連軍を追撃し、リーガの警察本部と武器庫を確保したのだという。先に述べたように、独ソ戦の始まりとともにラトヴィア人の反ソ抵抗組織が銃撃を開始しており、また現在の研究で、独ソ戦の前、ラトヴィアの地下抵抗組織に蜂起を促すため、ドイツから工作員が送り込まれていたことも明らかにされている<sup>29)</sup>。しかし、アラースについていえば、本人の証言以外に、そのような規模のパルチザンを指揮していたことを示す史料は存在せず、事前にドイツと何らかの接触を持っていたことを示す史料も存在しない。7月1日午後のシュタールエッカーとアラースの出会いは、むしろ偶然であり、両者を引き合わせたのは、特別行動隊の隊員で、シュタールエッカーの通訳を務めたハンス・ドレスラーであった。ドレスラーは、ナチの民族ドイツ人の回収で1940年にドイツに帰還したバルト・ドイツ人の1人で、アラースとは旧知の間柄だった<sup>30)</sup>。

シュタールエッカーと対面した後、部下を連れてアライスは、ヴァルデマーラ通り55番地の学生団体レットニアの家に移り、最初のコマンド隊員の募集はここで行われる。ついで7月3日ないしは4日、コマンドの本拠地は同じ通りの19番地に移動した。移動先の建物の3階は、ペールコンクルスツ<sup>31)</sup>の宿営所になっていた。ここで、レットニアやペールコンクルスツの名が出るのは偶然ではない。アライス自身レットニアの元団員であったが、次章で述べるように、これらは、両大戦間期のラトヴィアのナチに思想的親和性を持つ右翼団体である。7月4日の『テーヴィヤ』第1面に掲載された広告で、ラトヴィアから「有害分子」を除去するため、名指しでアライスの保安部隊(drošības komanda、ドイツ語ではSicherheitskommando)への志願を呼びかけられたのは、ペールコンクルスツやアイスサルギのメンバー、学生、元軍人だった<sup>32)</sup>。ユダヤ人のあいだで迫害者は、ペールコンクルスツ、アイスサルギ、アライス・ブルシェンなどと呼ばれた<sup>33)</sup>。

逃げ遅れた共産主義者の逮捕やユダヤ人の強制労働への連行は、7月1日のうちに始まり<sup>34)</sup>、7月2日から本格化した。ユダヤ人は、空爆で破壊された建物の瓦礫の撤去や、ソ連軍が掘った塹壕の埋め戻しに使用されたが、それと並行して、純粹に虐待と殺害目的の連行も執行された。この時期に連行されたのは主に男性であったが、2001年に回想録を刊行したマックス・マイケルソンの母は、7月8日、体調の悪い父の代わりに連れ去られたまま、二度ともどってこなかった<sup>35)</sup>。ユダヤ人の連行先は、リーガ中央駅近くの警察本部、アライス・コマンドが本拠をおくヴァルデマーラ通り19番地の建物、マティーサ墓地に隣接する中央刑務所のほか、主に女性が連行されたのは、ブラサ鉄道駅近くの当時テルミンカと呼ばれた監獄である<sup>36)</sup>。このユダヤ人狩りでシュタールエッカーの手先として働いたのが、民間人の服に赤白赤の腕章をつけたラトヴィア人補助警察員である。

警察本部の中庭で、ユダヤ人がラトヴィア人から受けた暴行のための暴行については、7月3日に息子とともに連行されたカウフマンが証言している<sup>37)</sup>。ユダヤ人は、尋問されるのでも、労働させられるのでもなく、まったく無意味に血まみれになるまで殴られ、髭をむしられ、髭でラトヴィア人の靴を磨くよう強要された。

さらにユダヤ人は、労働に回される者とそうでない者に選別され、処刑に回されたユダヤ人は、夜陰に紛れ、トラックでリーガ北東のピチェルニエキの森に移送された。ピチェルニエキの森は、リーガで最初のユダヤ人大量虐殺の現場となったところである。7月半ばまで、ほぼ連日行われた射殺を執行したのは、特別行動隊Aのルードルフ・バッツ指揮下のアインザッツ・コマンド(以下EKと略記)2であるが、主に犠牲者の見張りを受け持ち、部分的には射殺にも関与したのがアラース・コマンドである。戦後のナチ裁判で得られた証言によれば、トラックに詰め込まれ、森に到着したユダヤ人は、コマンド隊員が両脇を固める通路を屠殺場に向かう豚のごとく、棍棒と足蹴で穴まで追い立てられ、穴の淵で撃ち殺された。死体の詰まった穴が埋められ、すべての仕事が完了すると、両コマンドの隊員にパンとウォッカが振る舞われたという<sup>38)</sup>。

アラース・コマンドは、1941年夏から秋にかけて、約300人、別の証言では150人から180人の隊員を擁し<sup>39)</sup>、いくつかのグループに分かれて、少数のドイツ人指揮官の指示の下、地方の小さな町や村のユダヤ人の絶滅作戦にも従事した。

しかし、警察本部や刑務所という外界から遮断されたところで執行されたポグロムや、人里離れた森での処刑は、ユダヤ人に隣人であるべきラトヴィア人に対する恐怖と孤立無援の絶望感を与える効果はあっても、ハイドリヒが狙った自己浄化運動にはあたらない。7月はじめのリーガで最大の見せ場となるべく仕組まれたのが、7月4日の全シナゴークへの放火と破壊である<sup>40)</sup>。

東ガリツィアのルヴフのケースが典型例だが、独ソ戦が始まると、ソ連は軍の撤退を進める一方、監獄に収監されていた政治犯その他を大量処刑した。6月30日にルヴフに入ったナチは、ソ連支配からの解放者として間をおかずにポリシェヴィキの犯罪を暴くため、監獄の処刑体を一般市民に公開し、ユダヤ=ポリシェヴィキの仕業として写真入りで大々的に報道した。これが7月1日のルヴフで、市民の「ポグロム気分」を一気にエスカレートさせる引き金のひとつとなった。リーガの場合も同じ手法で、中央刑務所その他で殺害された囚人の死体の掘り出しが行われ、『テーヴィヤ』紙上でその無惨な写真が公開されたのが7月4日であった<sup>41)</sup>。おそらく偶然の一致ではないだろう。

シュタールエッカーの指示でゴーゴリヤ通りのリーガ最大のシナゴーク「大コーラル・シナゴーク」の破壊を執行したのは、アラーイス・コマンドである。

シナゴークが焼け落ちた後、街では、なかで数百人のユダヤ人が焼き殺されたという噂が流れた。リヴォシュは、シナゴークのなかで人が焼き殺されるのを見て気がふれた女性のことを記しており<sup>42)</sup>、またカウフマンは、スタブ通りのゼイレン・シナゴークで、ラビ、キーロフと30人のユダヤ人が殺されたと記している<sup>43)</sup>。しかし、シナゴーク破壊の詳細、とりわけ犠牲者の規模の詳細は、ほとんど明らかになっていない。ゴーゴリヤ通りのコーラル・シナゴークについて、ソ連時代のラトヴィアの公式見解では、シナゴークの地下室を避難所としていた約300人のリトアニア・ユダヤ人難民に加え、近隣に住むユダヤ人や街頭で拉致されたユダヤ人がシナゴークに詰め込まれ、2000人が殺されたとされた<sup>44)</sup>。これが誇大な推定であることは、筆者がインタビューしたヴェステルマニス氏も認めるところである。

これに対して、ソ連時代の誇大な数字に不快感を示し、犠牲者の数をきわめて限定的に評価するのがエゼルガイリスである。1978年のアラーイス裁判で証言した元アラーイス・コマンド隊員のゲナディイス・ムールニエクスによれば、シナゴークの周囲に人はおらず、シナゴークが燃えるあいだ地下から叫び声を聞いたが、そこにいたのはせいぜい5人か6人だろうというのである。さらにエゼルガイリスは、シュタールエッカーは、安息日が始まる7月4日の金曜日の夕方、礼拝のためシナゴークに集まるユダヤ人を狙って放火のタイミングを設定したが、22時に始まる夜間外出禁止令のため、人は集まらず、目論見がはずれたのではないかと推測する<sup>45)</sup>。

そうだとすれば何とも間抜けな話だが、それをさておいても、シナゴーク破壊の目的のひとつがポグロムの見せ場作りであるとき、夜間外出禁止令を知らないはずがないシュタールエッカーが、それにかかる時間帯に放火を設定する理由は理解不能である。むしろ、エゼルガイリス自身が著書で紹介しているもう1人の元アラーイス・コマンド隊員レオニツ・ヤンソンスのアラーイス裁判での証言は、放火が少なくとも日中に始まり、石造りの堅固な大シナゴークが焼け落ちるまで、数時間以上かかったことを推測させる。

「われわれのコマンドの約5人が<sup>3</sup>、私もその1人でしたが、ゴーゴリヤ通りのシナゴークに火をつけよ、という命令を受けました。それは、日中のことでした。アライスはわれわれに、住民のあいだにユダヤ人に対する憤激を引き起こすことが必要だと言いました・・・シナゴークへの放火を命じたのはアライスです。われわれは、ガソリン1缶をゴーゴリヤ通りのシナゴークに運びました。私とグループのもう1人のメンバーとで近所の消防署へ行き、シナゴークが燃やされるが、消火せず、注意して火が広がるのを防ぐようにと告げたのを覚えています。われわれがシナゴークへもどると、グループの他のメンバーは、すでに建物の戸口を開け、なかのものを壊して、そこにガソリンをまき、火をつけました。シナゴークが燃えるあいだ、関係者はまわりに立っていました。すでに遅い時刻で、夜間外出禁止令が出ていたので、そこにいた人々はわずかでした。建物への放火は、保安警察の徴を身につけたアライス・コマンドの隊員だけで行われました。私の記憶では、アライスはドイツ人の将校と車で乗りつけ、命令がどのように執行されたか点検したように思います<sup>46)</sup>。」

戦後の裁判で、ムールニエクスやヤンソンスの証言には大きな食い違いがあり、7月4日の状況を再現するのは非常に困難だが<sup>3</sup>、1941年7月7日付けの特別行動隊Aの報告「事報ソ連」第15号によれば、7月7日までに殺害されたユダヤ人の数は以下の通りであった。

「指揮官は、EK 1 a, EK 2 を率いてリーガに入った。街の確保は[ラトヴィア人]補助警察(400人)の設立によって組織的に行われた。したがって[ドイツ]軍は、もはやゲリラ兵に妨害されることはまったくなかった。補助警察からは、これまでに4人の死者が出た。補助警察部隊の指揮官に任命されたのはヴェイス中尉である。この部隊からラトヴィア人の民兵隊が生まれるといった本末転倒の事態が生じないよう、措置が講じられた。

この補助警察部隊のほかに、ポグロム執行のため、さらに2隊の独立の集団が設立された。全シナゴークが破壊され、これまでに400人のユダヤ人が殺害された。ポリシェヴィキによって20人のドイツ兵捕虜がリーガの兵舎で銃

殺された。調書の確認が行われ、そのさい、この銃殺に巻き込まれなかったドイツ兵1名が、リーガのあるユダヤ人によって撲殺されたこともまた判明した。

したがって1941年7月4日、同じ場所で、保安警察および親衛隊保安部の1コマンドによって100人のユダヤ人が銃殺された<sup>47)</sup>。」

### Ⅲ リーガのユダヤ人

本章では、いったん歴史を両大戦間に遡り、リーガにおいてラトヴィア人とユダヤ人の関係がどのようなものであったかを検証する。そのさい、はじめに述べたエゼルガイリスの第1の論点に関して、彼が、ラトヴィアは、両大戦間期ポーランドのような暴力的反ユダヤ主義が充満した国ではなかったというのは正当である。およそキリスト教ヨーロッパ世界で、歴史上、イエス殺しの民ユダヤ人に対する偏見や反感がなかった地域はない。しかし、そのなかでラトヴィア人は、相対的に反ユダヤ主義に関心を持たなかった。彼らの反感は、第1に、中世以来この地域の政治的、経済的支配者であったドイツ人に向けられてきたからある。

ラトヴィアは、第一次世界大戦後、ラトヴィア語が話される地域がひとつにまとまり、独立することで誕生した。この地域にユダヤ人が入るのは、隣国のリトアニアやポーランドに比べ、早くはない。1561年にリヴォニア騎士団が世俗化されるまで、騎士団領へのユダヤ人の移住は禁じられていた。両大戦間期のラトヴィアは、クルゼメ、ゼムガレ、ラトガレ、ヴィゼメの4県に分けられたが、クルゼメ、ゼムガレ地方にユダヤ人が入るのは、リヴォニア騎士団の世俗化後、ポーランドを宗主とするクールラント公国が成立してからである。ラトガレでは、ポーランド・リトアニア国領となった後、ユダヤ人の移住が本格化した。他方、リヴォニア戦争、ポーランド・スウェーデン戦争を経て、1721年までスウェーデンの支配下におかれたダウガヴァ川以北のヴィゼメでは、ユダヤ人は、期限付きの滞在のみ認められ、定住は原則的に禁止された。とくにスウェーデン・バルト帝国の大都市に発展したリーガでは、ドイツ人商人は、競争相手となるユダヤ人の入市を厳しく制限した。

1721年のニスタット条約でヴィゼメがロシア帝国領となり、次いで18世紀

末の3次にわたるポーランド分割でラトヴィア全体がロシア帝国の支配下におかれたが<sup>3</sup>、ロシア帝国でユダヤ人の定住が認められたユダヤ人定住地域に入ったのは、ヴィチェプスク県(ロシア語)の一部となったラトガレのみである<sup>48)</sup>。ユダヤ人定住地域の外に位置し、さまざまな抜け道があったとはいえ原則的にユダヤ人の移住が禁止されたリーガでは、1824年で、正規にはわずかに513人のユダヤ人がいたにすぎない<sup>49)</sup>。

リーガのユダヤ人口が増加しはじめるのは、アレクサンダー2世の下でユダヤ人に対する移動の制限が緩和されてからである。1867年に5232人(リーガの総人口の5.1パーセント)であったリーガのユダヤ人口(ユダヤ教徒人口)は、1881年には2万149人に急増した。それでもリーガでユダヤ人口が占める割合は11.9パーセントにすぎない<sup>50)</sup>。その後1913年まで、ユダヤ人口の絶対数は増加するが、第IV章で詳述するリーガの急激な人口増加により、ユダヤ人の占める割合そのものは7パーセントに低下する。同時期のポーランドやリトアニアで、ほとんどの大都市のユダヤ人口が約3割を占めたのとは大きな違いである。表1が示すように、ユダヤ人口が4分の1に達するダウガウピルスとレーゼクネは、いずれもかつてポーランド・リトアニア国の一部であったラトガレの都市である。第一次世界大戦までダウガヴァ川は、ヨーロッパ大陸である程度まとまったユダヤ人口が存在した地域の北限にあたり、その川向こうに位置するリーガでは、ユダヤ人社会の歴史は浅く、その規模も限られたものだった。

両大戦間期のリーガにおいて、ユダヤ人社会はどのような存在だったのだ

表1：ラトヴィアの主要都市別ユダヤ人口(1935年)

|         | 総人口     | ユダヤ人口  | %    |
|---------|---------|--------|------|
| リーガ     | 385,063 | 43,672 | 11.3 |
| リエパーヤ   | 57,098  | 7,364  | 12.9 |
| ダウガウピルス | 45,160  | 11,116 | 24.6 |
| イエルガヴァ  | 34,099  | 2,043  | 6.0  |
| ヴェンツピルス | 15,671  | 1,246  | 7.9  |
| レーゼクネ   | 13,139  | 3,338  | 25.4 |

The Jews of Latvia, 1919-1940, in: Josifs Šteimanis, *History of Latvian Jews*, New York 2002, p. 180.

ろうか。

その膨張政策により、広大な版図に多種多様な民族を抱え込んだロシア帝国は、彼らがツァーリへの忠誠を誓うかぎり、併合地域で抑圧的なロシア同化政策はとらなかった。バルト地方の歴史的支配者であったドイツ人は、この地方がロシア帝国領となった後もさまざまな特権を与えられ、そのまま帝国の支配層に編入される。ユダヤ人についていえば、ヨーロッパ・ロシアの諸民族の狭間に分散して居住する彼らは、外国人とも、極東や中央アジアの土着民とも異なる特殊な存在とみなされた。彼らを帝国にとって有益な存在に変えることは、帝国の課題と認識されてはいたが、そのさい、ユダヤ人が他の民族と融合しなければならないとは考えられなかった。この点でロシアの状況は、ユダヤ人の文化的、社会的同化と法的解放が相互に条件となり、また結果となって進行した19世紀ドイツと大きく異なる。

19世紀後半、アレクサンダー3世の下で進められたロシア化政策は、場合によっては「諸民族集団に均質性を強要する同化主義的位相」を伴ったが、その本来の目的は、遅ればせながら「ロシア語を媒介として斉一化された全国一律の国家装置の達成という国制レベルでの合理化」であり、必ずしもロシア同化政策への転換ではない<sup>51)</sup>。1913年に人口50万7476人であったリーガで、ロシア語を日常使用言語とする者は11万620人にとどまる<sup>52)</sup>。もちろん、支配エリートの言語であったドイツ語やロシア語に同化した非ドイツ人や非ロシア人は存在したが<sup>53)</sup>、ロシア帝国崩壊にいたるまで、ラトヴィア人、ドイツ人、ロシア人、ユダヤ人というこの地域の主要4民族は、それぞれの言語的、文化的同一性を保ったままであった。

この同一性は、独立後のラトヴィアで実現された少数民族保護政策により、両大戦間期を通じて維持される。ラトヴィアでは、少数民族の文化的自治が模範的に保障された。教育についていえば、国家と地方行政は、それぞれの民族言語で初等教育を行う学校に対して、児童数に対応した予算措置を講じるように義務づけられ、また7年間の初等教育は無料であった。

ユダヤ人の場合、その結果が表2である。ラトヴィア人とユダヤ人の関係を考える上で興味深いのは、独立後もない1922/23年当時で、ラトヴィア語教育校に通うユダヤ人児童の少なさであろう。ロシア帝国時代、この地域の

表2：ユダヤ人児童・生徒の学校教育言語別分布

## 初等学校

| 学 校 年   | イディッシュ語<br>またはヘブライ語 | ロシア語  | ドイツ語  | ラトヴィア語 | 計      |
|---------|---------------------|-------|-------|--------|--------|
| 1922/23 | 8,872               | 1,898 | 1,252 | 390    | 12,412 |
| 1935/36 | 10,562              | 18    | 100   | 1,551  | 12,231 |

## 中等学校

| 学 校 年   | イディッシュ語<br>またはヘブライ語 | ロシア語  | ドイツ語 | ラトヴィア語 | 計     |
|---------|---------------------|-------|------|--------|-------|
| 1922/23 | 1,241               | 2,032 | 494  | 101    | 3,868 |
| 1935/36 | 1,577               | 27    | 19   | 704    | 2,327 |

Mendel Bobe, *Four Hundred Years of the Jews in Latvia (A Historical Survey)*, in : M. Bobe, S. Levenberg, I. Maor, Z. Michaeli (ed.), *The Jews in Latvia*, Tel Aviv 1971, p. 70.

ボベは、1922/23年に比べ1935/36年の中等学校の生徒数が著しく減少した原因について、10代の若者のパレスティナへの移住と中等学校の学費負担の影響とを指摘している。後者の原因については、背景に1929年の世界恐慌後のラトヴィア経済の悪化がある。

ユダヤ人の共通語として機能したのはイディッシュ語であるが、クルゼメ、ゼムガレのユダヤ人にはドイツ語の影響が大きく、ラトガレのユダヤ人は、とくにロシア化政策以後、ロシア語の影響を受けた。マイケルソンの一家は典型的である。マイケルソンの父方の祖父母は、クルリャンディア県(ロシア語)出身のドイツ語を使用するユダヤ人であり、ラトガレ出身の母方はロシア語の使用者であった。マイケルソンの母は、ロシア語で教育する女子高等学校に通っている。ユダヤ人にとって、農民の言葉であるラトヴィア語は文化的魅力のない言語であり、ラトヴィア人相手に必要最低限の会話が成り立てば、それでよかった。合板工場を営むマイケルソンの父は、仕事ではラトヴィア語を使ったが、家では、ラトヴィア人の料理女と話すとき以外、ラトヴィア語は使われなかった。マイケルソンの家では、イディッシュ語もまた、教養あるユダヤ人が口にすべきではないジャルゴンであった。このような家庭の子供の当然の選択として、マイケルソンは1932年、ドイツ語で教育を行う初等学校に入学している<sup>54)</sup>。

1934年5月に国家緊急事態令を発動して成立したウルマニスの穏健な権威主義的独裁体制は、極左と極右の運動を封じ込め、すべての政党と国会の活動を停止し、それによってラトヴィアの政治的安定を実現しようとした。そのため、少数民族の権利保護を否認する極右の要求は退けられ、文化的自治は、むしろ奇妙な形で強化された。児童は、ラトヴィア語の教育校に行くか、帰属する民族の民族言語で教育を行う学校に行くか、いずれかを選択しなければならず、それ以外は認められなくなったのである。この政策の影響は、表2の1922/23年から1935/36年の生徒数の変化に現れている。

ドイツ人ではないマイケルソンは、ドイツ語教育校に通うことができなくなり、やむなく1934年秋からラトヴィア語の公立学校に転校した。彼の父にとってイディッシュ語での教育など論外であり、徒歩で通える範囲にヘブライ語教育校はなかったからである。転校は、ラトヴィア語能力が十分ではなかったマイケルソンに厄介を引き起こした。ラトヴィア語学校に通いながら、ラトヴィア人の親しい友達はいなかったという。このこともあってマイケルソンは、中等学校は私立のユダヤ人学校に入学した。この学校のもとの教育言語はドイツ語であったが、1934年から、教育言語をラトヴィア語とヘブライ語に変えることを余儀なくされる。しかし、生徒も教師もよくヘブライ語ができなかったため、実際には、いくつかの教科はドイツ語で教えられた<sup>55)</sup>。こうして学校をかえていったマイケルソンの少年時代の回想を見ると、露骨な反ユダヤ主義に悩まされることはなかったが、言語の違いゆえに親密な交際もない、ユダヤ人社会とラトヴィア人社会の希薄な関係のあり方の一側面が浮かんでくる。

次に、ユダヤ人は、経済的にはどのような存在だったのだろうか。リトアニアやポーランドでは、リトアニア人やポーランド人の圧倒的多数が農民であるのに対し、都市部に集中して住み、商業や金融業、あるいは職人業でも際だって高い比率を示したのがユダヤ人であった。このことがリトアニア人やポーランド人の目を引き、ユダヤ人の経済支配が攻撃されることになる。

確かにラトヴィアでも、表1、表3が示すように、1935年の9万3479人のユダヤ人のうち、半数近くの4万3672人がリーガに住み、以下、リエパーヤなど大都市にユダヤ人口の73.6パーセントが集中した。また、同じく1935年のユダヤ人就業者数4万1174人のうち、48.63パーセントにあたる2万21人が

表3：ラトヴィアの民族別人口構成(1935年)

| 民 族    | 人 口       | %      |
|--------|-----------|--------|
| ラトヴィア人 | 1,472,612 | 75.50  |
| ロシヤ人   | 206,499   | 10.59  |
| ユダヤ人   | 93,479    | 4.79   |
| ドイツ人   | 62,144    | 3.19   |
| ポーランド人 | 48,949    | 2.51   |
| そ の 他  | 66,819    | 3.42   |
| 計      | 1,950,502 | 100.00 |

その他に含まれるのは、ベラルーシ人、リトアニア人、エストニア人等である。  
 The Jews of Latvia, 1919-1940, in: Josifs Šteimanis, *History of Latvian Jews*,  
 New York 2002, p. 181.

商業に、28.74パーセントにあたる1万1838人が工業に従事し、農業に従事する者は約1パーセントと極端に少ない<sup>56)</sup>。しかし、ラトヴィアの場合、このようなユダヤ人の特異性を相対化したのがドイツ人である。すなわち、第一次世界大戦まで農村の支配者でもあった点を別にすれば、ユダヤ人と似たパターンを示したのがドイツ人であった。表3、表4を見れば、ラトヴィアのドイツ人6万2144人のうち、優に半数を越す3万8523人がリーガに集中していた<sup>57)</sup>。しかも第一次世界大戦まで、ドイツ人による経済支配は厳然たるものがあつた。

戦前の農地問題についていえば、クルリャンディア県では1817年に、リフリャンディア県(ロシア語)では1819年に、ともにロシア本土に先立ち農奴解放が行われたが、これは、ただちに農民の土地取得を意味するものではなかった。そのため、1905年当時でなお、人口の1.6パーセントでしかないドイツ人の領主貴族が、ラトヴィアの農地の48パーセントを領有していた<sup>58)</sup>。1905年革命は、都市より農村部で過激化し、リフリャンディア県のラトヴィア人居住地域では、183の荘園と72の領主の館に火がかけられ、部分的ないしは完全に消失、多数のドイツ人領主が殺害された。同様にクルリャンディア県では、229の荘園と42の館が襲われた<sup>59)</sup>。

また、世紀転換期に工業都市へと変貌したリーガについていえば、1880年に商工業ギルドに登録された営業860のうち、60.4パーセントが少数者のドイ

表4：リーガの民族別人口構成(1935年)

| 民族     | 人口      | %     |
|--------|---------|-------|
| ラトヴィア人 | 242,731 | 63.01 |
| ユダヤ人   | 43,672  | 11.34 |
| ドイツ人   | 38,523  | 10.00 |
| ロシア人   | 28,346  | 7.36  |
| ポーランド人 | 15,774  | 4.10  |
| その他    | 16,017  | 4.16  |
| 計      | 385,063 | 99.97 |

端数処理のため、合計は100%にならない。

Andrew Ezergailis, *The Holocaust in Latvia 1941-1944*, Riga 1996, p. 400, Appendix 3 b.

ツ人の手にあり、人口では最多のラトヴィア人が所有する営業は6パーセントにすぎない。ドイツ人に次ぐロシア人の比率は16.7パーセント、ユダヤ人は13.9パーセントで、両者の比率は人口比にほぼ見合うものだった<sup>60)</sup>。20世紀はじめにかけて、商工業部門におけるラトヴィア人営業者の数は確実に増加したが、それでも1900年のリーガの300の大規模工場の所有者を見ると、ドイツ人が実に71.5パーセントの多数を占め、以下、ユダヤ人8.1パーセント、ラトヴィア人6パーセント、ロシア人5.3パーセントの順であった<sup>61)</sup>。

ラトヴィア独立後、農地改革の断行によって、ドイツ人地主はほとんど財産を失う一方、完全な法的平等権を得たユダヤ人は、ラトヴィア経済において存在感を増す。1935年の統計によれば、ラトヴィアの企業4万7921のうち、ユダヤ人はその約1割にあたる4996を所有した。特に、従業員が50人から99人の企業61では27.87パーセントが、100人以上の大企業30では33.34パーセントがユダヤ人の所有で、いずれもユダヤ人の人口比(4.79パーセント)を大きく上回っている。特にユダヤ人所有者の比率が高かったのは、工業部門でいえば、化学工業(32パーセント)、製紙業(43.05パーセント)であった<sup>62)</sup>。そのためラトヴィアの右翼政治家は、「ドイツとロシアの頸木から解放されたラトヴィア人は、いまやユダヤの頸木につながれるかもしれない」と警告し<sup>63)</sup>、右派の複数のマスコミもこれに同調した。

しかし、独立後、ラトヴィア人の反感が集中的にユダヤ人に向かったとは

言い難い。ユダヤ人に対する風当たりが強まるのは、1929年の世界恐慌でラトヴィア経済が大打撃を受けた後である。この時期、東欧各国に登場した極右団体と歩調を合わせ、ラトヴィアでは、1932年をはじめにウグンスクルスツ<sup>64)</sup>、ウグンスクルスツが禁止されると1933年には後継のペールコンクルスツとといった反共・反ユダヤの極右団体が現れ、「ラトヴィアをラトヴィア人に、ラトヴィア人にパンと仕事を」をスローガンに掲げた。彼らのモデルはムツソリーニのファシスト党、ルーマニアの鉄衛団、また隣国エストニアで1929年に組織された「独立戦争退役軍人同盟(略称VABS)」であった。彼らは、1922年憲法の停止と政治的権利をラトヴィア人に限定するよう要求する。そのさい彼らは、非ラトヴィア人であるユダヤ人に対してあからさまな敵意を示すと同程度に反ドイツ人であった。

組織と同名の機関紙『ウグンスクルスツ』の1932年8月20日号は次のように述べる。

「ドイツ人は、アーリア人はみなそうだが、わが国はドイツ人の植民地になるべきだと言って憚らない。ドイツ人少数者がラトヴィア人多数者を支配すべきであり、必要とあらば武力で支配を勝ち取るべきだというのだ。われら[ラトヴィア人]の公然たる敵はここにおり、彼らに向かって武器を取る必要もあるだろう。われらラトヴィア人は、大いなる決断と勇気を持って彼らの不愉快きわる態度を打ち砕かねばなるまい。

ユダヤ人は別問題だ。彼らは決して公然たる闘争に姿を現すことはない<sup>65)</sup>。」

ペールコンクルスツは、思想的にナチズムに共鳴しつつも、ラトヴィアのドイツ人がドイツのナチに接近することは許せなかった。1933年1月、ドイツでヒトラーが政権を握ると、同年5月14日の、同じく組織と同名の機関紙『ペールコンクルスツ』は、「ヒトラーというメシアの到来を期待」し、ヒトラーの勢力を笠に着て、ラトヴィアで半ば主人になったかのように感じているドイツ人のふてぶてしさに警告を発した。

「今日、全般的闘争はユダヤ人に向かっているとしても、このことは、われ

われが、ラトヴィアから[ドイツ人]貴族領主制時代の哀れむべき残骸を取り除くことはしない、などということを意味しない<sup>66)</sup>。」

1932年から1934年に活動が禁止されるまで、ウグンスクルスツ、次いでペールコンクルスツを率いたグスタフス・ツェルミンシュによれば、その勢力は1万2000人から1万5000人であるが、実勢はその半数程度であろうと見なされている<sup>67)</sup>。彼らは、危機に対応できない議会政治に不満を持つ学生のあいだで支持を集め、有力な学生団体を影響下においた。アラーイスが学生団体レットニアに加入していたことは、先に述べたとおりである。そのアラーイスについて、彼をシュタールエッカーに引き合わせたバルト・ドイツ人ドレスラーが、アラーイスをドイツ人にも「例外的に」優しい態度で接する人物として記憶していたことは、当時のラトヴィア人とドイツ人の関係を示して興味深い<sup>68)</sup>。

ペールコンクルスツは、1934年3月20日に議会を通過した法によって活動を禁止される。その後1934年5月に成立したウルマニス政権による弾圧強化で、組織は多数の指導的活動家を失った。こうして極右の活動を封じたウルマニスの下で進められた大規模私企業の国有化<sup>69)</sup>は、比較的高い割合を占めたユダヤ人の大企業所有者に影響なしではすまなかったが、ラトヴィア人所有者がこの政策を免れたわけではない。また、反ユダヤ・プロパガンダは厳しく禁止された。

マイケルソンは、1934年に転入したラトヴィア語の公立学校の中途半端な雰囲気について、「あからさまに反ユダヤ的というわけではなかったが、決して友好的ではなかった。自分たち[ユダヤ人]は、そこで歓迎されているとは感じなかった<sup>70)</sup>」と回想している。しかし、ともかくウルマニス体制の最後まで、反ユダヤ的出版物は許可されず、ドイツからのユダヤ人亡命者の受け入れも続けられた。このときリーガに避難先を求めたユダヤ人の1人が、高名な歴史研究者シモン・ドブノフであった。ラトヴィアの歴史において、ユダヤ人がラトヴィアに在るということが大問題としてクローズアップされ、ユダヤ=ポリシェヴィキというパロールが街中にあふれ出すのは、1941年7月1日以後のことである。

- 1) 詳しくは第V章を見よ。
- 2) Max Kaufmann, *Churbn Lettland. Die Vernichtung der Juden Lettlands*, München 1947. Nachdruck, Konstanz 1999, S. 67f. フルプンは、イディッシュ語でホロコーストにあたる語である。ヘブライ語ではショアーといわれる。なお、カウフマンはイエツケルンの処刑日を2月5日と誤記している。
- 3) 第V章を見よ。
- 4) Kaufmann, a.a.O., S. 68.
- 5) Bernhard Press, *The Murder of the Jews in Latvia 1941 - 1945*, translated from German by Laimdota Mazzarins, Evanston, Illinois 2000, p. 54. Cf. also p. 45. 原書は1992年にベルリンで出版された。
- 6) Alexander Bergmann, *Aufzeichnungen eines Untermenschen*, Bremen 2009, S. 31. エゼルガイリスは、ソ連軍がラトヴィアに迫った1944年、両親とともにラトヴィアを逃れた。
- 7) Andrew Ezergailis, *The Holocaust in Latvia 1941 - 1944*, Riga 1996. 同書の増補改訂版は、1999年にラトヴィア語で出版された。
- 8) ナチの親衛隊保安部および保安警察の派遣部隊で、ドイツ軍に同行し、軍事占領直後の現地で治安確立の任務にあたった。そのさい、ユダヤ人の大量殺害を執行したことで悪名高い。
- 9) 野村真理『ガリツィアのユダヤ人——ポーランド人とウクライナ人のはざまで』人文書院、2008年、189ページ。その後、1942年はいじめのヴァンゼー会議を経て、絶滅収容所が本格的に移働しはじめると、これら秘密議定書にもとづくソ連支配地域のユダヤ人社会は、現地での銃殺と絶滅収容所への移送とにより、1942年末にはほぼ消滅する。ヒトラーが唱えたユダヤ＝ポリシェヴィキに対する殲滅戦は、この地域のユダヤ人に関しては、驚くべき速さで実現された。
- 10) Fernschreiben Heydrichs an die Einsatzgruppenchefs vom 29. 6. 1941, in : Peter Klein (Hg.), *Die Einsatzgruppen in der besetzten Sowjetunion 1941/42*, Berlin 1997, S. 319.
- 11) パルト3国からレニングラード(現在はペテルブルク)方面に向かった。
- 12) Einsatzgruppen A, Gesamtbericht bis zum 15. Oktober 1941, in : Alfonsas Eidintas, *Jews, Lithuanians and the Holocaust*, Vilnius 2003, Supplement No. 1, p. 466.
- 13) 詳しくは、野村真理「自国史の検証——リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって」(野村真理・弁納一編『地域統合と人的移動』御茶の水書房、2006年所収)を参照。
- 14) 注13)を見よ。
- 15) 注9)にあげた拙著の第2部、第3部。
- 16) カウナス、ルヴフ、リーガ等の大都市に比べ、地方の小さな町や村でユダヤ人の絶滅が誰の手でどのように執行されたのか、地方を対象とするホロコースト研究は、ほとんど進んでいない。2000年に出版されたヤン・グロスのポーランド語の著書『隣人たち』(Jan Gross, *Sąsiedzi*, Sejnz 2000. 2001年に英訳が出版された。)は、独ソ戦開戦後の1941年7月、それまでソ連の支配下にあったポーランド東部の町イエドヴァ

ブネで、町のユダヤ人の絶滅が同じ町のポーランド人住民の手で行われたことを明らかにし、どこよりもポーランド社会に衝撃を与えた。そのさい、グロスの著書の正否をめぐる起こった論争は、地方のホロコーストについて、歴史家が依拠できる史料は限られており、しかも、それらはしばしば矛盾した内容を含むことを示している。独ソ戦開戦後、ソ連からドイツへ権力が移行するまで、権力空白期のラトヴィアの地方の状況については、Juris Pavlovičs, *Change of Occupation Powers in Latvia in Summer 1941: Experience of Small Communities*, in: Valters Nollendorfs and Erwin Oberländer (ed.), *The Hidden and Forbidden History of Latvia under Soviet and Nazi Occupations 1940-1991*, Riga 2005, p. 92-103を参照。

- 17) Elmar Rivosh, *Memoirs*, translated from Russian by Emil Tubinshlak, Riga 2008, p. 11.
- 18) ロシア語で執筆された覚書の完全版が公刊されるまでの経緯については、前掲、Rivosh, *Memoirs*の序文および7ページの注(1)を見よ。
- 19) リトアニアでも同様であった。Cf. Dov Levin, *The Lesser of Two Evils. Eastern European Jewry under Soviet Rule, 1939-1941*, translated from Hebrew by Naftali Greenwood, Philadelphia 1995, p. 275. なお、1940/41年のソ連支配時代に正規の手続きでソ連軍に徴兵されたラトヴィア人兵士の一部は、ソ連軍がラトヴィアを撤退するさい脱走し、ラトヴィアに残った。他方、ソ連軍と行動をともにしたラトヴィア人兵士の一部は、第V章で述べるように、1944年、再びソ連軍兵士としてラトヴィアにもどり、武装親衛隊ラトヴィア志願兵軍団の兵士としてナチ・ドイツ側で銃を握ったラトヴィア人同胞と対戦することになる。
- 20) Rivosh, op. cit., p. 11f. Vgl. Kaufmann, a.a.O., S. 46. Cf. Press, op. cit., p. 41. また注13) 参照。
- 21) Rivosh, op. cit., p. 12.
- 22) *ibid.*, p. 16. 後述する1941年7月7日付けの特別行動隊Aの報告「事報ソ連」第15号(注47)を見よ)は、ドイツ軍の先遣隊からソ連軍の捕虜になった兵士が出たのではないかと推測させる。
- 23) *ibid.*, p. 18.
- 24) Kaufmann, a.a.O., S. 48. Max Michelson, *City of Life, City of Death. Memories of Riga*, Boulder, Colorado 2001, p. 85.
- 25) Rivosh, op. cit., p. 20. [ ]内は引用者による補足。以下、同様。Vgl. Bergmann, a.a.O., S. 14.
- 26) Andrej Angrick u. Peter Klein, *Die „Endlösung“ in Riga. Ausbeutung und Vernichtung 1941-1944*, Darmstadt 2006, S. 72.
- 27) *Tēvija*, numurs 1, 1. 7. 1941, p. 1. スカイストラウクスは、7月7日までに同じく元軍人のヴォルデマールス・ヴェイスと交代した。注47)の「事報ソ連」第15号を見よ。
- 28) 7月1日のラジオ放送に関して、カウフマンは、ラトヴィア人により、次のようにユダヤ人ボグロムが呼びかけられ、また、呼びかけには元軍人ヴェイス(注27)を見

よ)の名がかかわっていたとする。

「同日、ラトヴィア人もまた、ラジオを通じ、民族的心情を持つラトヴィア人はみな、今日1941年7月1日にも内部の敵(ユダヤ人)に対する闘いに志願せよ、と呼びかけた。」(Kaufmann, a.a.O., S. 49.)

カウフマンの記憶は、ソ連時代の公式見解であり(Ezergailis, op. cit., p.213), 西側研究者にも採用され(Angrick u. Klein, a.a.O., S.74), マイケルソンによっても踏襲されている(Michelson, op.cit., p. 86)。他方、エゼルガイリスは、その真实性を強く否定している。エゼルガイリスによれば、7月1日のラジオ放送の内容に関して、残された記録には「内部の敵に対する闘い」の呼びかけは見出せないという。詳しくはEzergailis, op. cit., p. 214f. を参照。少なくともヴェイスについては、彼は、おそらくドイツ軍がリーガに入る前、ソ連軍に対して攻撃を開始したラトヴィア人グループのリーダーの1人であり(Angrick u. Klein, a.a.O., S. 73, Anm. 24), また、ソ連軍の追撃や残兵狩りにおけるドイツの軍事的協力者であったが、次に述べるアライスと異なり、ユダヤ人に対するポグロムは、ナチに割り振られた彼の主要な任務ではなかった。注47)の「事報ソ連」第15号を見よ。

- 29) リトアニアでは、独ソ戦の前、1940年11月17日、元駐ベルリン・リトアニア大使カジス・シュキルパにより、ナチ・ドイツの息がかかった反ソ抵抗組織LAF(リトアニア活動家フロントの略称)が設立され、また、東ガリツィアには、第一次世界大戦後まもなく設立され、第二次世界大戦を前にナチへの接近を強めた反ソ抵抗組織OUN(ウクライナ民族主義者組織の略称)が存在した。しかし、ラトヴィアには、それらに匹敵する組織は存在しなかった。

カールリス・カンゲリスによれば、1941年5月1日に東プロイセンのマリーエンブルクで、ドイツのイニシアティブで設立されたラトヴィア戦士全国同盟(Nationaler Verband Lettischer Krieger)は、ラトヴィア人の抵抗組織の実体を持っていない。独ソ戦の前夜、ドイツの防衛諜報機関は、ラトヴィアの親ナチ地下組織に情報や指示を流し、また対ソ蜂起のための工作員を送り込んだが、そのさい、それらがラトヴィア人自身の運動であるかのように見せかけるため、この同盟の名が利用された。ドイツをラトヴィアの組織に仲介したのは、1940年の共産党政権の成立でラトヴィアに帰国できなくなった在外勤務中のラトヴィア軍人や、ドイツに亡命した軍人である。(Kārlis Kangeris, Kollaboration vor der Kollaboration? Die baltischen Emigranten und ihre „Befreiungskomitees“ in Deutschland 1940/1941, in: Bundesarchiv (Hg.), *Europa unterm Hakenkreuz. Okkupation und Kollaboration (1938–1945)*, zusammengestellt u. eingeleitet von Werner Röhr, Berlin/Heidelberg 1994, S. 173.)

- 30) Ezergailis, op. cit., p. 178, 180.  
 31) 鉤十時を表すラトヴィア語のひとつで、ペールコンスは雷、クルスツは十字を意味する。組織については第Ⅲ章を見よ。  
 32) Tēvija., numurs 4, 4. 7. 1941, p. 1. アイスサルギ(Aizsargi)は、1919年、とりわけ地方

の治安維持のため、ラトヴィア臨時政府によって創設された祖国防衛隊を出発点とする擬似軍事組織。名称は、ラトヴィア語の動詞sargat(守る)に由来する。1934年のウルマニスの権威主義的独裁体制の成立と維持に大きな役割を果たした。ラトヴィアが独立を失う直前の1940年で、その隊員は約6万8000人に達したが、共産党政権への移行後、組織は解体され、幹部隊員の80パーセントがシベリアに送られた。彼らがボリシェヴィキに強い恨みを抱いていたことは言うまでもない。

- 33) プルシェンとは、ドイツ語のBurschの複数形で、学生団体の正会員をさす。
- 34) Press, op. cit., p. 44. 7月1日から2日にかけての夜に発生したユダヤ人に対する暴行、殺害について(たとえばPress, op. cit., p. 47), これがパウルコンクルスツやアイスサルギ、学生団体等のメンバーによる自発的行為であったか、あるいは、自発性を見せかけつつ、裏にドイツ側の指示があったのか、いずれも史料的に裏付けることはできない。自身7月1日夜の暴行発生を記憶するヴェステルマニス氏によれば、エゼルガイリスが後者の立場をとるのに対し、ヴェステルマニス氏が個人的に知るリーガのホロコースト生存者は、いずれも前者の見解をとっているという。(Mārgers Vestermanis, *Der Lettische Anteil an der >>Endlösung<<. Versuch einer Antwort*, in: Uwe Backes, Eckhard Jesse, Rainer Zitelmann, *Die Schatten der Vergangenheit*, Frankfurt a.M./Berlin 1990, S. 434.)
- 35) Michelson, op. cit., p. 44.
- 36) ibid. 中央刑務所は、ユダヤ人のあいだでは「ツェントラルケ」と呼ばれた。Boris Kacel, *From Hell to Redemption. A Memoir of the Holocaust*, Niwot, Colorado 1998, p. 13.
- 37) Kaufmann, a.a.O., S. 53.
- 38) Angrick u. Klein, a.a.O., S. 86f. 墓穴掘りをやらされたのは、中央刑務所の囚人だった。
- 39) Rudīte Vīksne, The Arājs' Commando Member as Seen in the KGB Trial Files: Social Standing, Education, Motives for Joining It, and Sentences Received, in: *Holokausta izpētes problēmas Latvijā*, Rīga 2001, p. 357.
- 40) ただし、ペイタウ・シナゴグは旧市内の建物密集地にあったため、破壊されたが、放火は免れた。
- 41) *Tēvija*., numurs 4, 4. 7. 1941, p. 4.
- 42) Rivosh, op. cit., p. 80.
- 43) Kaufmann, a.a.O., S. 55.
- 44) Press, a.a.O., S. 46. 民兵隊にいたリヴォシュは、リトアニアから来たユダヤ人避難民を目撃している。Rivosh, op. cit., p. 15.
- 45) Ezergailis, op. cit., p. 219f. 緯度の高いラトヴィアでは、7月の安息日は、かなり遅く午後10時頃に始まる。
- 46) Ezergailis, op. cit., p. 220.
- 47) Chef der Sicherheitspolizei und des SD, Ereignismeldung UdSSR Nr. 15 vom 7.7. 1941. ただし筆者が閲覧したのは、ユダヤ資料センターを兼ねるリーガのユダヤ博物館が

所蔵しているオリジナル史料の複写である。報告では、ヴェイス (Veiss) をNeißと誤記している。

独ソ戦開始後、1941年10月15日までの状況を記したシュタールエッカーの報告 (Einsatzgruppen A, Gesamtbericht bis zum 15. Oktober 1941, op. cit., p.456) によれば、ダウガヴァ川左岸での戦いでは、ドイツ軍に少なからぬ戦死者が出たが、ドイツ軍の右岸上陸後、ラトヴィア人の補助警察部隊が設立され、彼らが敗走するソ連軍の追撃や残兵狩りにあたった。そのため、ドイツ軍ではなく、ラトヴィア人から死傷者が出た。ナチは、このようなラトヴィア人の部隊が、ラトヴィアの再独立要求に連動するラトヴィア人の自立した軍隊組織に発展することを認めなかった。(Vgl. Angrick u. Klein, a.a.O., S. 103f.)

- 48) クルゼメとゼムガレをカバーするクルリャンディア県(ロシア語)は、1799年にユダヤ人定住地域に追加されたが<sup>5</sup>、1829年に除外された。
- 49) Ezergailis, op. cit., p. 60.
- 50) Ulrike von Hirschhausen, *Die Grenzen der Gemeinsamkeit. Deutsche, Letten, Russen und Juden in Riga 1860–1914*, Göttingen 2006, S. 65.
- 51) 橋本伸也「帝国・ユダヤ・教育経験——19世紀ロシア帝国におけるユダヤ人教育の展開」, 駒込武, 橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂, 2007年所収, 40ページ。
- 52) Hirschhausen, a.a.O., S. 57.
- 53) 1913年の調査で、ドイツ語を日常使用言語とする者が8万823人であるのに対し、民族的帰属意識においてドイツ人と回答した者は6万8775人である。同様にロシア語とロシア人については、前者が11万620人、後者は9万8959人であった。ユダヤ人の場合はこの関係が逆転し、民族的にユダヤ人と回答した者は3万3591人であるのに対し、ユダヤ人の言語(イディッシュ語あるいはヘブライ語)の使用者は2万1771人であった。ラトヴィア語とラトヴィア人については、大きな差は見られない。(Ebd., S. 61.)
- 54) Michelson, op. cit., p. 11f.
- 55) *ibid.*, p. 70f. 1940年にラトヴィアがソ連に併合されると、教育言語はロシア語となり、ヘブライ語での教育は停止された。ラトヴィア語は、語学の授業でのみ教えられた。(ibid., p. 77.)
- 56) (anonym), *The Jews of Latvia, 1919–1940*, in: Josifs Šteimanis, *History of Latvian Jews*, translated from Latvian by Helena Belova, revised and edited by Edward Anders, New York 2002, p. 189. ヨシフス・シュテイマニスの英訳書『ラトヴィア・ユダヤ人の歴史』の第14章として収録された*The Jews of Latvia, 1919–1940*は、1942年はじめにアメリカ合衆国国務省に提出され、国務省の文書館に保存されていた小冊子である。記述内容から、執筆時期は1940年6月のソ連によるラトヴィア占領後、独ソ戦開戦以前と推定される。シュテイマニスの著書の第13章でエゼルガイリスが解説しているところによれば、執筆者はアメリカ在住の複数のラトヴィア・ユダヤ人と推定され、エゼルガイリスは、マックス・ラセルソン (Max Laserson, 1887–1951) も関係している

のではないかと見ている。ラセルソンは、イェルガヴァ生まれのユダヤ人で、法律学者であるが、1922年10月8日の第1回国民議会選挙で社会主義シオニストの政党ヒタハドゥートの候補者として当選をはたし、以後、1931年まで国会議員としても活動した。1934年のウルマニスによるクーデタ後、逮捕されるが<sup>3</sup>、国外移住を条件として解放され、パレスティナに移住、1939年、さらにアメリカ合衆国に移住し、コロンビア大学で教鞭をとった。

小冊子は、1935年に実施された人口調査に基づき、当時のラトヴィアのユダヤ人の社会的・経済的状況を統計的に明らかにしている。本稿では、ユダヤ人の人口分布や職業構成に関して、ほかに資料が入手できなかったかぎり、この小冊子の統計資料を利用した。

- 57) これに対してラトヴィア第1の少数民族であるロシア人20万6499人のうち、リーガに住むのは2万8346人にすぎない。
- 58) Andrew Ezergailis, *The 1917 Revolution in Latvia*, New York/London 1974, p. 2.
- 59) Andrejs Plakans, *The Latvians*, Stanford, California 1995, p. 105.
- 60) Hirschhausen, a.a.O., S. 79. 1878年まで、ギルドへの加入は義務化されていた。
- 61) Ebd., S. 80.
- 62) (anonym), *The Jews of Latvia, 1919–1940*, op. cit., p. 191.
- 63) Šteimanis, op. cit., p. 74.
- 64) ペールコンクルスツと同じく鉤十時を表すラトヴィア語のひとつで、ウグンスは火を意味する。
- 65) Cit. from Ezergailis, *The Holocaust in Latvia*, p. 82. エゼルガイリスはnote18で1932年を1933年と誤記している。
- 66) Cit. from Ezergailis, *The Holocaust in Latvia*, p. 81.
- 67) ibid.
- 68) アラーイス裁判で、1941年7月のリーガの警察本部でのアラーイスとドレスラーの再会、次のように記録されている。「ドレスラーは、軍隊時代のアラーイスを好意的に記憶していた。というのも、彼も、彼のバルト・ドイツ人の同輩も、アラーイスには、ほかのラトヴィア人教官ほどいじめられなかったからである。ドレスラーは、警察本部に集まっていたラトヴィア人のなかにアラーイスを見つけ出し、『ヴィクトル、生きていたのか!』と言いながら彼を抱きしめた。」(ibid., p. 181.)
- 69) その方式は、たとえば共産党政権による懲罰的なブルジョアの財産剥奪とは異なり、あくまでも国家による私企業の買い上げであった。
- 70) Michelson, op. cit., p. 73.

付記：本稿は、科学研究費補助金基盤研究(B)による研究「国家社会主義からの離脱・進化の多様性：市場経済化の国際戦略・制御能力の比較研究」の研究成果の一部である。